

眼下に益子の里が広がる丘の頂上にキンタさんの自宅と、  
そのすぐ下に仕事場がつくられた。(p.60)

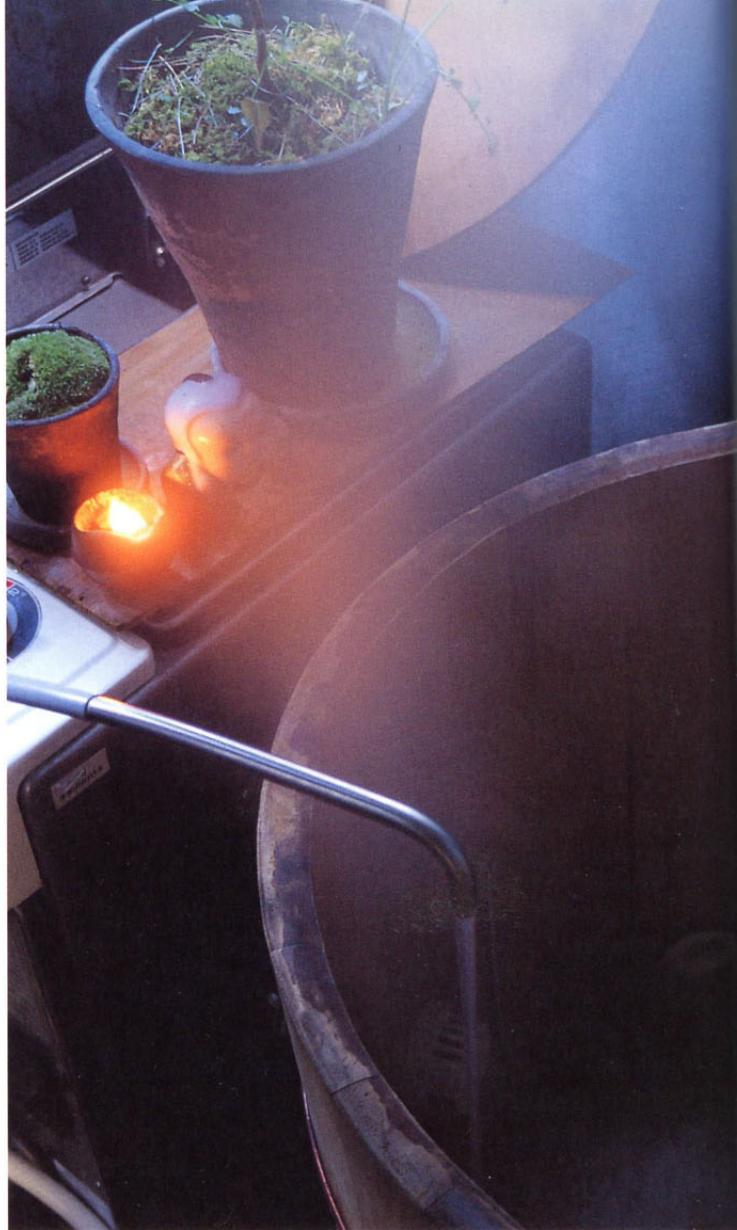
浄化と再生の  
風呂

## 等身大の居心地 つくり手たちによるセルフビルトの風呂場

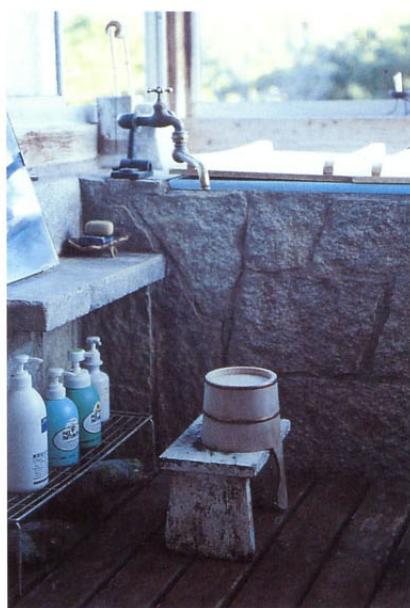
取材・文 堀口博子 撮影 池内功和

栃木県益子町。

陶芸の里としてつとに有名なこの地には、  
つくり手たちをひきつける空気がある。  
それは、のどかな里の風景に巧みに隠されている  
大地を強烈に意識させる地脈だと思った。  
山々のなだらかな起伏に沿って耕された棚田が、  
陽を浴びて美しい生命の交響を奏でる。  
そんな一幅の景色の中で湯煙を上げる喜びは、  
言葉では言い尽くせないものがあるだろう。  
ここに、自然に寄り添って生きる方法を選んだ  
人々の、生活の場がある。  
彼らはセルフビルダーであり、  
自分の居場所を自らの手でつくることを、  
当然の営みと考えている。  
もちろん風呂も然りである。  
彼らのつくる風呂場は手づくりゆえの大らかさで、  
滲みるような味わいを醸している。



星さんの黒い浴室は、立ち昇る湯気をくっきりと映し出す。(p.62)



仲間とつくったキンタさんの風呂、  
5年を経てますます愛着がわいてきたようだ。(p.60)



那珂川のおだやかな流れはダグラスさんにとって  
かけがえのない日本の風景だ。(p.64)



ダグラスさんは雑木林の中に家族のための風呂場を建てた。(p.64)

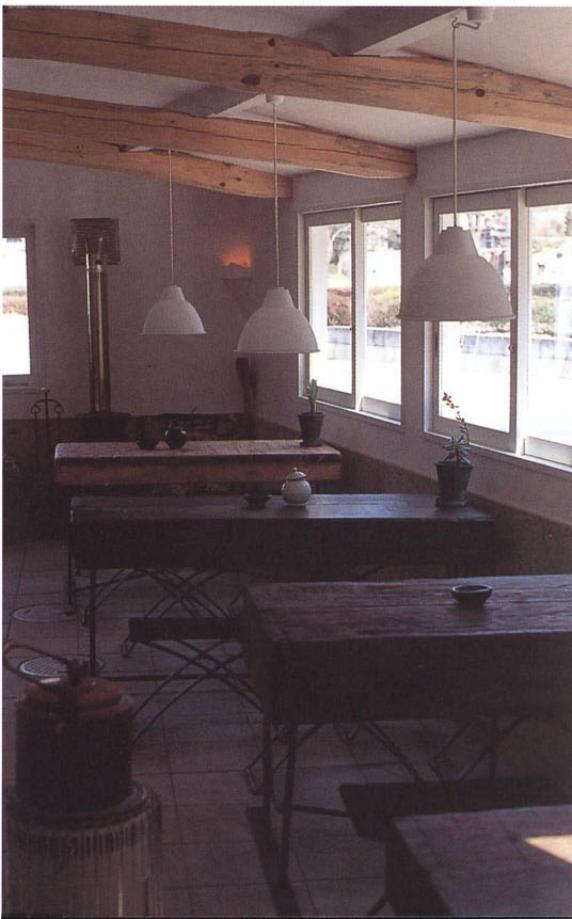


右/「意味の裏側をつくれる人」  
昨年からコラボレーションを始めたスター・ネットの馬場さんは  
キンタさんのものづくりの感覚をそう表現する。  
左/仕事場を共有する陶芸家の石川若彦さんとともに  
作品を展示しているギャラリーはコンテナを改造したもの。  
枕木を立ち上がりに並べ、どこかブエプロスタイル。  
作品はキンタさんの鉄の狛犬。



下2点/最近改装したスター・ネット (p.63) のカフェ。  
窓からは須田ヶ池の桜を間近に臨むことができ、  
より外へと開かれた空間となった。

カフェテーブルは、酒蔵から譲り受けた舟の板を  
馬場さんのアイデアを基にキンタさんが製作した。  
酒をたっぷりと吸い込んだヒバ材やケヤキ材の  
まろやかでどっしりとした量感とは対照的に、  
鍛鉄の織細で軽やかな脚との調和が美しい。



## 風呂桶の回りに石を積んだ風呂場は三方位全開。 山並みを眺めながら浸かる湯の気持ちよさ。

益子町 金田茂夫

鉄と土と木を素材に自在な表現活動を続け

ているアーティスト、金田茂夫さん、通称キンタさんの風呂は圧巻だ。益子の里を見渡せる丘のてっぺんにある自宅の風呂場は、母屋に接する一面を除いて三方全開。百八十度

の絶景を我がものにできる最高のロケーションにある。さらに天窓を設け、夜空を見上げる楽しみも忘れていない。

元はペンションのバーベキュー小屋だった建物を住まいとして改造したのが八年前、外

置きの五右衛門風呂が、当時の風呂だった。

そして廃棄物の浴槽を手に入れたのをきっかけに浴室を増築した。「広くて明るい風呂にしたかった」ので、母屋から前庭へ突き出す意表をつく格好で、風呂場の位置はラフに計画された。「この辺がいいね」という具合だ。まずコンクリートで土間を打ち、風呂桶を置き、それを取り囲むように石が積まれ、柱

が立ったは何とその後だった。

「大工さんなら風呂桶は最後に置くんだろうけど、僕はせっかちだから最初に風呂から始めてしまいますよ(笑)」

仕事の合間をみての作業だったので二週間を要したが、仲間たちとワイワイやりながらつくった風呂には其処彼処に思い出話があふれる。総予算は十五万円ほど。煙突とアルミサッシ、木材を購入し、浴槽をおおう立派な白御影は石屋さんに譲ってもらった。灯油バ

ーナーや屋根材などはすべて拾い物、もらいたい御影は石屋さんに譲ってもらつた。灯油バーナーの火を燃やすための薪は、木の手にすつかり馴染んだ古道具で再編成したキンタ流の風呂には、不揃いなものた

ちの哀愁が漂い、心なごませてくれる。

「最初に素材ありき。素材がもつっているものを考へると自分の見てなかつたものが見えてくるんです。形を最初に描いてしまうと狭くなる。狭い世界にいると技術を使いたくなつ

てつまらなくなる」

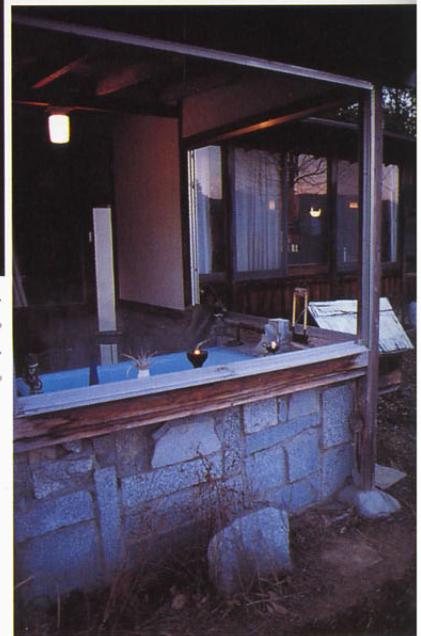
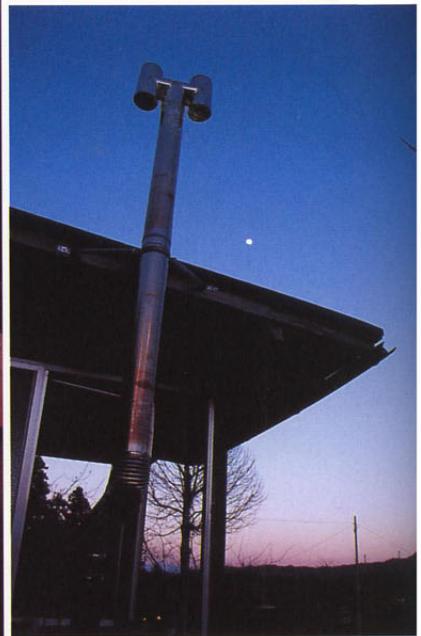
キンタさんのものづくりへの軽やかな信念は、「何事も等身大」を大切にするこうした日常にも反映されている。キンタさんにとっての風呂は、仕事で土まみれ、埃まみれ、油まみになつた体をさっぱり洗い流し、夜の思考の時間へとシフトするためのひとときだと言う。満月の夜には窓を開け放し、酒を持ち込んでの風流風呂を味わう。

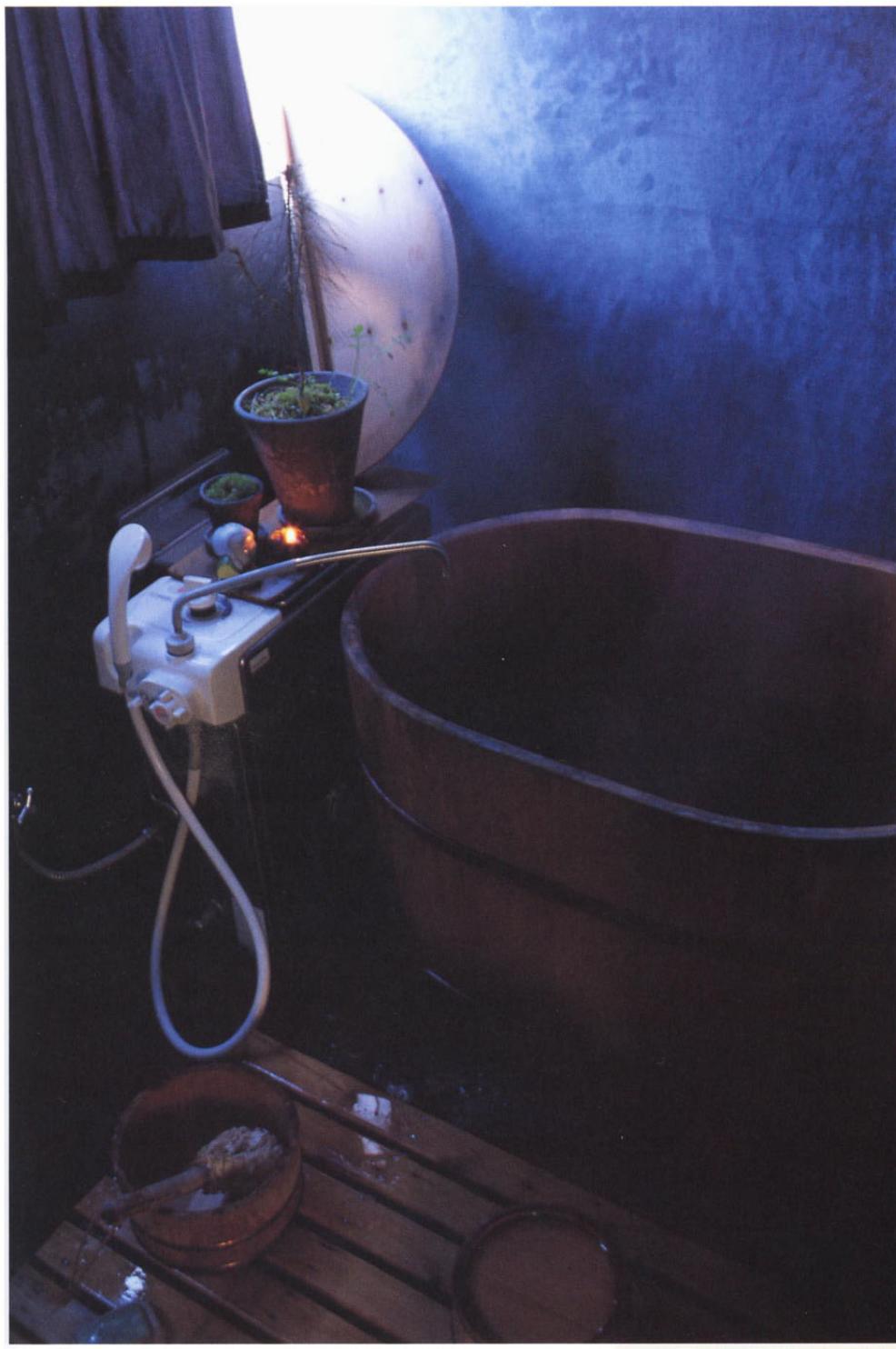
「僕は毎日風呂に入るような奴じやなかつたんだけど、この風呂ができてすつかり風呂好きになりました」薪で焚く五右衛門風呂の大変さを知つてからこそ、たつた二十分で沸く灯油風呂の有り難さが分つたのだと言う。風呂場の前の柄の木が、もう間もなく新芽を吹く季節を迎える。風呂の窓から青々と繁る木の姿を眺めるのを、キンタさんはとても楽しみにしていた。



上/暮れなずむ里の夕暮れに、  
三方全開で周囲の自然と溶け込む爽快さ。  
人目をはばからないオープンな風呂場から、  
手づくりならではの格別な居心地が伝わってくる。

上/空に向かってのびる煙突が愛嬌たっぷりに煙をあげる。仕事を終え、ひと風呂浴びる幸福の時。  
下/「重いので手に取った順から積んでいった」  
白御影の、成り行きでできたでこぼこ面白い。  
パートナーで染色家の美雪さんにとって、  
外からも使えるこの浴槽は染め上った布を  
水洗いするのに格好の水場となるそうだ。

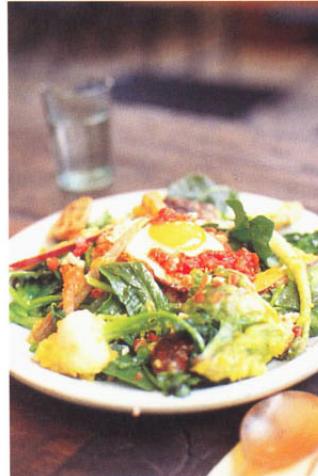




左/少しきめを特注したというサワラ材の風呂桶が  
黒い浴室の中で不思議な気配をつくる。  
木の風呂は手入れが大変と言われるが、  
「お湯を入れる前にさっとブラシで浴槽を洗うだけ」と星さんは言う。



上/スターネットの食は、  
星さんと素材とのコラボレーション。  
益子の野菜、豆腐、玉子、地粉、肉類。  
生産者は、自分で育てた素材が星さんの手によって  
思いもかけない料理となって出された時、  
もっといいものを育てよう、  
今度はこんなものを育ててみたい、  
いろいろな発想が湧いてくるのだそうだ。  
左/「鶏そぼろご飯」は、馬場さんおすすめの一品。  
たっぷりの野菜とともにいただく鶏そぼろご飯は、  
お腹にもやさしい味わいだった。



#### STARNET GALLERY & CAFE

益子を訪れるたびにスターネットでカフェオレを飲みたくなる。ヨーロッパの馬小屋がイメージにあったという建物へと足を踏み入れると、そこには生きる場のデザインの美しさと心地よさがある。東京から益子へ表現の場を移して早2年、この地にスターネットを起ち上げた馬場告史さんは、地元との親密な関わりを〈ものづくり〉の何よりの素材としながら、衣食住にわたるさまざまな提案を益子から発信している。

栃木県芳賀郡益子町大字益子3278-1 tel.0285(72)2270  
12:00~20:00 金曜定休

「土に近い生活」から生まれるものづくりを

実現するため、星恵美子さんは東京から益子へと移住した。今から二年前のことだ。ス

ターネットギャラリー＆カフェをつくった馬場浩史さんとともに、スターネットをゼロからスタートさせた。地元の有機食材を使つたスターネットの料理は、星さんならではの素材とのコラボレーション。同じメニューでも、その日に集まる材料次第、シェフの気分次第で閃くアイデアには、いつも驚かされる。

そんな星さんの住む家は、スターネットを建築する際、大工さんらに用意したプレハブの簡易宿泊施設を自分たちの手でカスタマイズしたものだった。壁に断熱材を入れ、床下には竹炭を敷き詰め、玄関に蔵の分厚い木戸をはめ込んだ。それはプレハブのイメージを一瞬にして吹き飛ばしてしまうほど痛快で、快適な住まいだ。

その星家で、かねてより風呂の存在が気になっていた。黒の浴室とは、後にも先にも星星宅以外に知らない。風呂の発案者は、やはり馬場さんであった。馬場さんはスターネットの内装や外装でも黒の表情を巧みに演出しているが、そうした発想の最初の試みが星

さん浴室だったとか。

「昔の風呂場は暗かつたですよね。電球ひとつの薄暗い中に、使い込まれて黒くなつた木の風呂桶だけがあつて、ゆらゆら湯気が立ち込めていた。すべてが吸い込まれてしまうような不確かな空間をつくつてみたかった」と当時を回想する馬場さんのイメージの黒は、漆喰のようなマットな質感だった。そこで、モルタルに松煙を混ぜることを思いつく。予想は的中。しかし「本当は真っ黒になるはずだったんです。二月の寒い時期に塗つたので凍つてまだらになつてしまつた」と残念そうだが、炭色の壁にサワラ材の木の風呂桶がしつくり溶け込んでいる。

近頃すっかり見かけなくなつた木の風呂だが、今でも僅かに残る桶職人によってどっこい生き続けている。星さんの風呂桶も特注品で、馬場さんの埼玉の実家近くの七十歳になる職人に依頼した。意外に手頃な価格で一式九万円ほど。「木の風呂は腐るから面倒がられるけど、八年ぐらい経つたら太陽に干して締め直せば長く使えるものなんです。何より木の香は換えがたい」と馬場さんは話す。

星さんは、出来上がつた風呂に黒い防水ペイントを取り付けた。黒い浴室は黒い布によつてさらに謎めいた氣配をつくる。蠟燭を灯し、柚子湯やよもぎ湯など益子で採れる季節の薬湯を楽しむそうだ。

暗闇の中で嗅覚が拡張される快感とはどんなものだろうか。家人いわく、「思ひぬ考えが浮かぶ部屋」。黒い浴室とは異次元へのトリップを誘う侵入口かもしれない。

右/無駄がなく、必要なものだけを機能的に

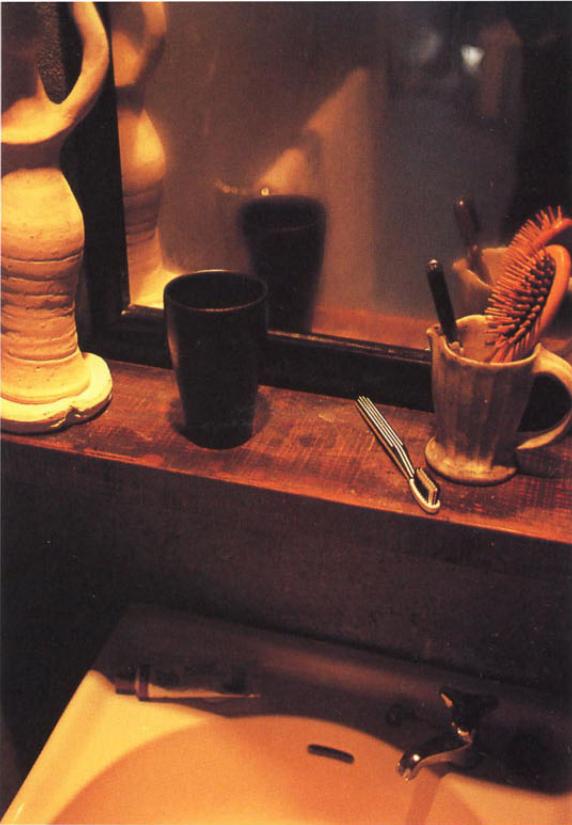
アレンジした星さんの暮らしぶりは、どこかシェーカースタイルを思わせる。

でも決して禁欲的ではなく、ラヴリーでポップな遊びのしつらえがあたたかい。

下/洗面所の壁にはモルタル+松煙に藁を加えて

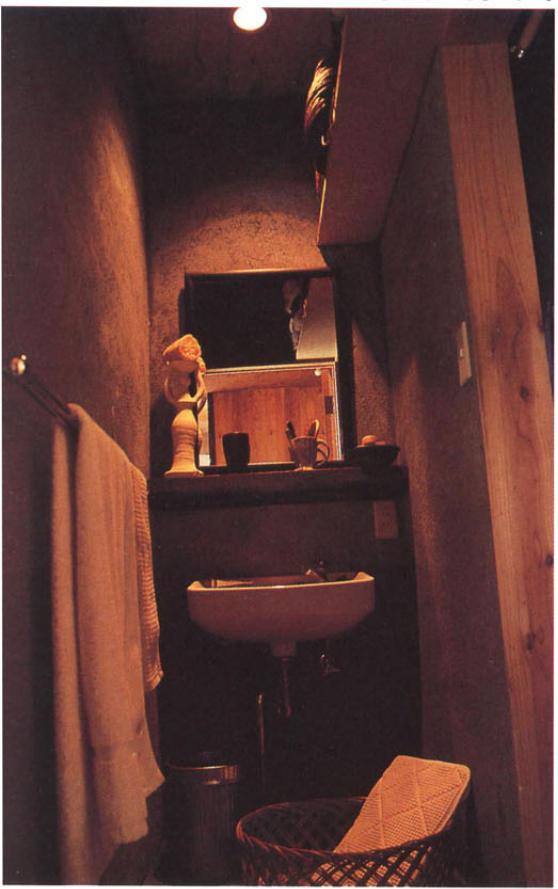
テクスチャーを変えてみた。

人ひとり左右ぎりぎりのスペースだが、黒の中に立つと距離感が消えて、意外に狭さを感じない。



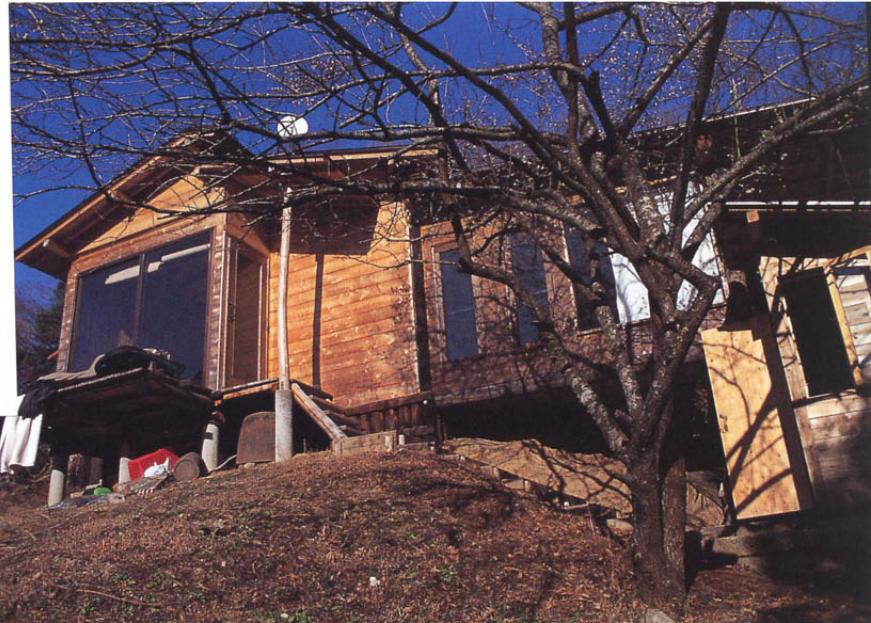
## プレハブの現場小屋を全面的に改装。 黒い壁に囲まれた暗闇に湯気が浮かび上がる。

益子町 星 恵美子



右/子供の頃から住宅建設に携わる父親を手伝っていたので、木を扱うことには慣れていた。工事には苦労もあったけれど、本を買い、独学でようやくここまでつくり上げた。左/母屋から風呂場までの階段は屋外にある。

「風呂から出て、空を眺めつつ母屋に戻るのは気持ちがいい」と、ダグラスさん。



## 那珂川の河原の石をひとつずつ埋め込み、水の音や木々の気配と一緒にとなる。

茂木町ダグラス・ブラック

右/流木を利用した  
「湯の小屋」の取っ手。  
下/風呂場づくりでいちばん時間  
がかかったのが、この石の床。  
どの石をどこにどう並べるか、  
「1日で終わると思ったのに、  
3日もかかってしまった」そうだ。



ダグラス・ブラツクさんは、野の風呂をついた。森に差し込む光は浴室へと忍び込み、湯槽に木の景がゆらぐ。置二畳ほどのささやかな水辺だが、そこには雄大な開放感がある。

アメリカ、カンザス州生まれ。日本の土仕事の奥深さに魅せられ大学卒業後来日。一九九一年、益子の隣町、茂木にダグラスさんは根を下ろした。器づくりだけの陶芸ではなく、舞台空間でのオブジェや音楽家のための太鼓

など、土による造形の可能性を果敢に探ろうとする姿勢から生みだされる作品には、彼の一環したテーマとも言える原始の胎動が焼き込まれている。

ゆるやかに流れる那珂川を見下ろす斜面に土地を借り、畑と仕事場をつくったのが七年前、そして二年前に結婚。妻の香織さんが妊娠のを期に本格的な家づくりが始まった。



上右/那珂川までの散歩が一家の毎日の習慣だ。  
ダグラスさんの土太鼓の音が河原によく響く。

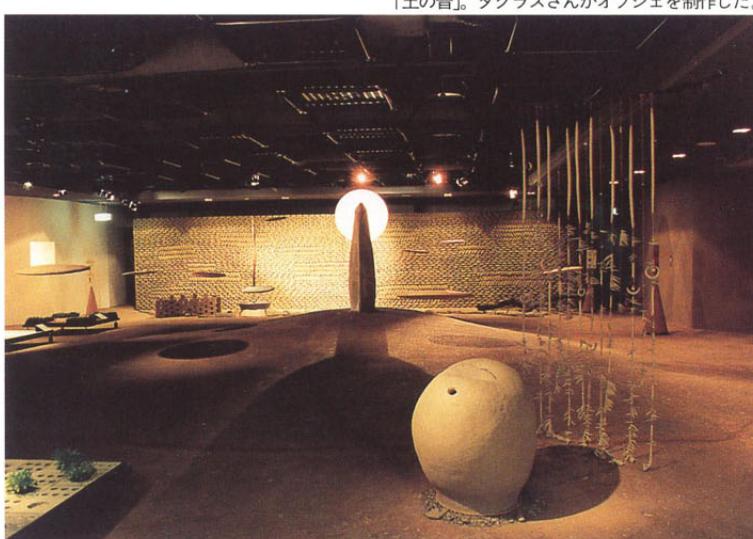
上/木の風呂桶は

星さんのものと同じ職人さんに依頼した。  
黒壁は同じくモルタルに松煙を混せたもの。

天窓から降り注ぐ光が気持ちいい。  
窓の外の木々が若葉をつけ始める。

夏にはうっそうとした森になるだろう。

下/1996年、東京赤坂のXSITEHILLで開かれた  
「土の音」。ダグラスさんがオブジェを制作した。



「よかつたら入っていいませんか。本当に気持ちのいいお風呂なんんです」。体の調子が悪くても家のお湯にゆっくり浸かれば治ってしまっても

しまう。香織さんは夫のつくった風呂をそう絶賛する。森に湧く聖なる泉を想わせる、グラ

ック家の風呂の治癒力にあやかつてみたい衝

動にかられ、お誘いを受けることにした。

たっぷりと湯がはられた木の風呂桶からこ

に選んだのは、浴室のすぐ横が沢が流れ、水音が風呂場に心地よく響くのを想像したからだつた。

多少の不便を押してでも、ここを場所

を濡らす。水に映る光の文様に見とれながら、

先ほど一家に導かれ散策した那珂川のすがす

がしい風景が蘇る。一見何気ない石だが、ダ

グラスさんが一年かかって、散歩の合間に拾

い集めた那珂川の幸福な石たちだ。

その中で、たつたひとつ金色に輝く石に目

を奪われた。「ガラス作家の友だちのゴミを

もらつた」という五センチほどのガラス玉が

排水溝近くに埋め込まれている。一気に流れ

集まる水の勢いは玉の周りで渦を巻き、美し

く煌めく。風呂に入るたびに遭遇するこの小

さな自然現象は、一歳半になつたばかりの幼

子にどんな残像を定着させるのだろうか。

つくり手たちの風呂場には、水と戯れるこ

とを楽しむ無垢の心が宿っている。それが何

よりの居心地のよさだと思つた。